


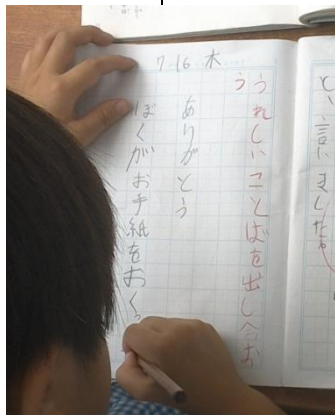
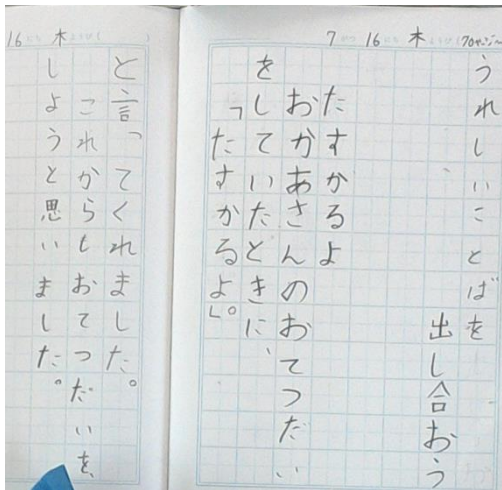


よつば

平成27年月7月16日（木）NO. 12（発行者：冬木）

本時は「うれしいことば」の第1時だった。本時では、言われてうれしかった言葉とその時のことを思い出し、文章にまとめた。また、友だちの書いた文章を読み、感想や共感できるところを伝え合った。

ループリック

		指導者	参観者
A	<p>うれしい言葉を一つ選び、それを言われたときのことや、そのときの気持ちを文章に書くことができ、友だちの意見に感想を言うことができる。</p>	<p>「どんなとき」、「うれしい言葉」、「思ったこと」に分けて文章に書くことができた。</p> <p>友だちの文章を読んで、「わたしも言われたことあるよ。」などの感想を伝えることができた。</p> 	
B	<p>うれしい言葉を一つ選び、それを言われたときのことや、そのときの気持ちを文章に書くことができる。</p>	<p>「どんなとき」、「うれしい言葉」、「思ったこと」に分けて文章に書くことができた。</p> 	<p>感想を言い合う時間をしっかり取るために、うれしい言葉を発表する時間をもっと短くしたり、感想の視点を初めに伝えたりすることによって、Aにできたのではないだろうか。</p>

C	うれしい言葉を一つ選び、それを言われたときのことや、そのときのことを文章に書くことができない。	支援がないと、文章を書くことができなかった。書きたいことを聞き取って、ノートのマスの横にお手本を書いたら、書くことができた。 うれしかった言葉を自分で選ぶことができなかった。声かけをして、うれしかった言葉を選び、文章を書くことができた。	
---	---	---	--

今回の授業では、ループリックのAは、感想を伝えられているかどうかは、評価しにくかった。机間指導で感想を聞いた子どもはAと評価できるが、そのほかの子どもはAかBを判断するのが難しかった。ノートなど残るもので評価できるようなループリックにするか、振り返りで自己評価をさせるようにすればよかった。

また、前半のうれしい言葉を出し合うところをもっと時間を短縮して、後半の、書いたり感想を言い合ったりするところに時間を取ることと、感想を言うときに感想の視点をしっかりと伝えることができれば、Aの子が増えたと思う。



指導と評価の一体化を具現化する教師の活動場面は、45分の授業の中で実はそんなに多くはありません。というよりも、多くの評価活動の場を持つことができないのが現実です。通常、指導者は黒板の前に立ち、発問したり、説明をしたりして、一人ひとりの児童を丁寧に見ることができません。そのような時は全体を見回して、きちんと聞いているか、書く活動に取り組んでいるかいないかを判断できるくらいです。本来、評価活動は、児童の活動によって、一人一人がきちんと学習内容の定着ができていないかを評価し、できていなければもっとできる子に、できていなければもっとできる子に支援する活動ですので、指導者は黒板の前だけでは、きちんと評価できないのです。冬木先生の授業では、一人ひとりの書く活動を構成し、机間指導をして、児童が書いている内容が適切に書かれているのかどうかを、個別に丁寧に評価し、指導をしていました。ループリックCの児童がCのままでなかったのは、冬木先生の児童一人ひとりをあたたかく見守り、個性に合わせた指導の賜物だったと思います。(井上)